

【中学生区分】

宮城県優秀賞

「障害という境界線をなくすために」

大崎市立古川西中学校

2年 加藤 暁翔

私たちは今、不自由のない生活を送れている。丈夫な体、自由の利く手足、よく見える目、よく聞こえる耳があるからだ。では、これらが一つでも欠けていると不自由なのか。しかし、できることが限られ、自由が利かないのは事実だ。

私は、学校の総合学習で、白杖体験と車いす体験をしたことがある。白杖体験では、白杖を持ち、目隠しをしてステージの上を歩きました。いつも見慣れているステージ上でもちょっとした障害物があるだけで歩きづらく恐怖を覚えた。この体験では、目が見えない分、足裏の感触や音を頼りにするしかないということが分かった。車いす体験では、普段は何でもない小さな段差でも自力で越えるのは難しく、サポートがないと越えることができなかった。これらを体験して思っていた以上に大変だということが分かった。しかし、生まれながら障害があれば一生、けがや事故で障害が出れば死ぬまで、向き合っていかなければならない。その人たちの辛さや、悲しさ、悔しさは私たちには、想像できない。

しかし、障害を持っていること自体に同情するのはどうだろう。私はそれも違うと思う。昨年行われたパラリンピックでは障害を持っている選手たちが躍動した。選手たちの努力、勝利への執念、喜び、懸命に闘う姿勢は、何らそこらのスポーツと変わりはない。また、人々に与える勇気、希望、夢は、アスリートもパラアスリートも同じくらいだ。それなのに、かわいそうだとか気の毒だと言うのは間違っている。障害を持っていても、いなくても、一生懸命生きてることに変わりはない。だから私は普段通りに接するこ

とが、誰も傷つかず、いい関係だと思う。

それでも、障害を持っている以上、できることは限られていて、サポートがないと生活ができないのは確かだ。だから、私は障害を理解し、寄りそうことが大切だと考えた。障害を知ることで、やれること、やれないことが見えてきて、気持ちを理解できるため、正しいサポートができる。そして、近すぎず、遠すぎず、ちょうどいい距離感を保てると思う。

私は、パラリンピックを見て障害はハンデではなく個性だということに気がついた。障害によって境界線が生まれているように感じる。だが、それは私たちが、障害をハンデだと思うことによって生まれてしまっていると思った。私たちに得意、不得意があるように障害もできること、できないことがある、個性なのだ。そして障害を個性だと思うことで心の距離が縮まって、境界線がなくなることが、本当の意味で人権を守られると私は思う。